

深い結びつきをもち、学校そのものはまちづくりや防災の拠点としての機能を併せ持っている。

このような役割を考慮し、学校別に、個々の事例ごとに具体的な方策を検討し、今後の学校のあり方、統廃合時における跡地利用も含めて、関係者等の理解を得て統廃合の対象校の再配置、具現化に向けた実施計画を策定する必要がある。

奥出雲町内の児童・生徒数の推移

	平成元年	平成20年	平成30年(推計)
幼稚園	411	162	128
小学校	1,422	787	489
中学校	797	480	276
計	2,630	1,429	893

②児童・生徒数の推移

本町の児童・生徒数の推移を見ると、平成元年に幼稚園児が四一人、小学生が一、四二二人、中学生が七九七人在籍していたが、二十年後の平成二十年度には、幼稚園児は一六二人(六一%減)、小学生は七八七人(四四%減)、中学生は四八〇人(四〇%減)となった。

さらに十年後には、幼稚園児が一二人、小学生が四八九人、中学生が二七六人に激減することが見込まれ、少子化と学校の小規模化は避けられない状況にある。

③複式学級について

児童数が少なく、一つの学年だけで学級を編制できない場合、国の基準では、二学年(引き続く二つの学年で十六名以下)を合わせて複式学級を編制している。

現在、町内の十一の小学校中五校に複式学級があり、平成二十六年には八校となることが見込まれる。

複式学級ならではの良さがあるものの、マイナス面も大きい。

例えば、下学年が上学年の

内容を学習する場合は、内容の理解度が大きな問題となる。複式学級が増加すると教職員の配置数も減り、専門教師の確保にも困難をきたし、教師の勤務も通常の勤務以上の負担をもたらすことになる。

また、全校児童数が十五名以下になると、教員の配置基準により、教員数がさらに減少し、教頭が学級担任をするか、教頭無配置校となり、学校の管理運営が厳しくなり、ひいては教育水準の低下にもつながる恐れがある。

一方、教科指導については、個人指導が徹底する利点はあるものの、多様な意見を述べたり、討論することによって思考の拡大、多様な価値観を育むためには、限られた人数による学習では限界がある。少人数学級、とりわけ「一人学級」、「一人学年」といった極小規模の学校では、男女比率の偏りや異性のいない学級が生じ、心身の発達に望ましい教育環境を保障することができない。

④課外活動について

現在、町内には様々なスポーツ少年団があり、児童によ

二、幼稚園及び保育所における 幼児教育の充実について

答申

(1)幼稚園・保育所

幼保一体的な運営

(2)極めて園児が少ない園

統廃合を検討

今後の保育所や幼稚園等の運営は、乳幼児の生活や発達・学びの連続性を大切にし、幼稚園・保育所の一体的な運営による幼児教育の充実を図る必要がある。また、極めて園児が少ない幼稚園については、その存続のあり方を探るとともに、より望ましい形での統廃合について検討する必要がある。

総論

①乳幼児期の保育・教育

現状と課題

乳幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う



重要な時期である。

同時に子育て世代の親たちが安心して子どもを産み育てることができ、子どもと共に地域で暮らすことの喜びと充実を味わえるよう条件整備していくことは、子どもの発達に良い影響を及ぼすだけでなく、地域の少子化に対する根本的な施策である。

○歳児から五歳児までの乳幼児数は、十年前の平成十一年度八四三人から平成二十年

度には、五七三人(三三%減)となり、今後も減少することが推測される。

さらに就労形態の多様化、核家族の増加など、都市化の形態が現れ始めている。

②幼稚園においては

町内九園のうち同年齢同一学級編制の園は一園のみで、他の園は異年齢混合学級である。

異年齢の中でつながりや育ちは大切ではあるが、同年齢学級の仲間として共通の目的を見出し、協力しながら実現する喜びを味わうことなどに困難な面がある。今後、さらに幼稚園の就園児数は減少していくものと予想され、集団が形成されにくく、十分な教育効果が発揮できない状況も懸念される。また、幼稚園の一日の教育時間は四時間を標準としている。

しかし、時代の流れや親の要望により、教育時間の終了後や夏休み等に「預かり保育」を実施しているが、園により利用者数等に偏りがみられ、そのあり方についての検討も必要と考えられる。



る活気あふれる活動は、大きな教育的意義がある。

一定以上の規模の学校では活動の選択肢も多く、児童が主体的・意欲的に活動できる場となるが、児童数の減少にともない、選択肢も限られたものになっている。

また、現状では学校単独でのチーム編成が難しく、複数の学校の児童によりチームが編成されているが、学校間の行事の調整や練習時間など様々な制約がある中での活動となっている。

⑤校舎等の現状について

児童生徒の安全確保は学校運営の基本であり、老朽



▲改築が予定されている亀嵩小学校

化した学校施設の整備が求められる。

平成二十六年には、四校の五棟が五十年以上となり、電気配線等の老朽化が進み、危険度が増大している。

また、幼・小・中学校二十二校中十一校の二十三棟が、昭和五十六年以前の旧耐震基準で設計施工され、うち十七棟は何らかの補強工事が必要である。

厳しい財政状況の中で、順次改修・補修を行っているが、今後、現状のまま学校施設の整備を行うことが妥当か、判断する必要がある。

③保育所においては

少子化とはいえ、毎年入所児は増加している。

これは近年、保護者の産休・育休明けの早期職場復帰により、乳児の年度中途入所が極めて多くなったことも背景にある。

加えて、〇歳から就学前までの一貫した「養護」と「教育」の保育を願うとともに、安心して働きたいという保護者の願いから三歳以上の入所児数も多くなってきた。また、子育てをしながら安

心して働けるように、「保育時間の延長」、「病児・病後児保育」、「発達支援の必要な子どもへの保育」、「休日保育」など保護者への多様な子育て支援が必要とされる。

この答申を尊重し、ふるさと奥出雲の次世代を担う子供たちが、心豊かで、たくましく未来を切り拓いていける環境づくりのため、今後も長期的な視野に立ち、関係機関、地域の皆さんと検討・協議を進めていく考えです。

冬の思い出 三井野原でスキー教室



今年も、町内の小学校では、1月中旬から2月上旬にかけて、スキー教室が行われました。

児童たちは、スキーのレベルに合わせて、三井野原スキー学校の講師から、道具の使い方や滑り方、マナーなどの指導を受けました。

教室が終わる頃にはスキーにも慣れ、友達と一緒に気持ちよさそうに、銀世界を楽しんでいました。

児童たちは、口々に「すごく楽しい!もっと滑りたい」など話し、グレンデは子供たちの元気な声が響きわたっていました。